沖縄県立博物館紀要　第24号　1—28，1998

沖縄南部旧喜屋武間切（きゃんまぎり）のグスク群について（一）

當眞嗣一

A Group of Gusuku(castle) located at
Kyan Magiri (administrative districe) in southern part of Okinawa Island

Shiichi TOMA

1、はじめに

沖縄県教育委員会が昭和58年刊行したグスク分布調査報告書の中での沖縄本島及びその周辺離島のグスク分布密度は、北部地区45箇所、中部地区65箇所、南部地区113箇所となり北部地区に薄く、南部地区に厚い分布状況を示している①。高い分布密度を示す南部地区のなかでもひときわ高い密度を示す地域は糸満市であり、42平方kmの面積に43箇所のグスクが確認され１平方kmあたり１件以上の高密度の分布になっている。この糸満市にあってもさらに高密度の地域が糸満市南部のかつて喜屋武間切と称されていた地域である。

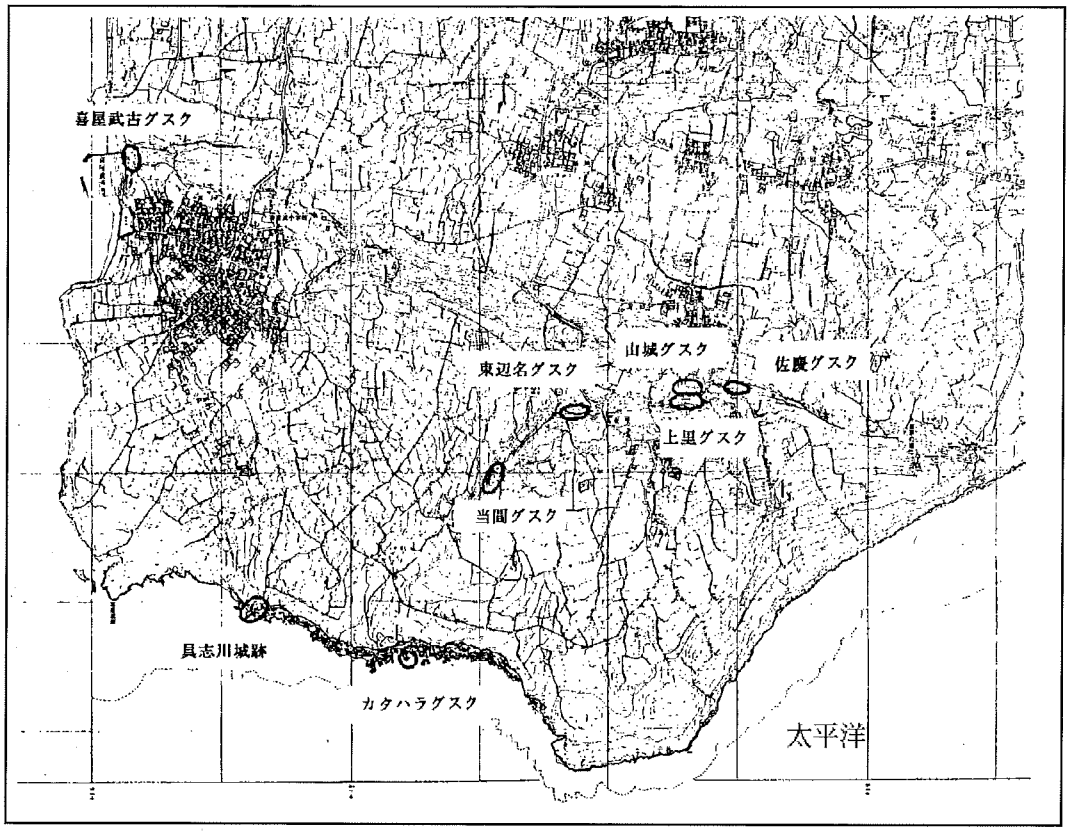
糸満市の南端に位置する旧喜屋武間切は沖縄南端の一部を占め、太平洋や東中国海に臨む地域である。一説では喜屋武の地名は、沖縄本島の最も端というところから「～まで」の意味の「きやめ」の転訛だともいわれている②。また、沖縄戦末期には激戦地となったところで、海岸部や石灰岩台地に発達した岩陰や洞窟の中に避難民や日本兵が追いつめられ多くの犠牲者が出たところでもある。この沖縄本島最南端の旧喜屋武間切には琉球石灰岩の岩塊を高く積み上げて築かれたグスクが６か所も存在する③。とくに特徴的なのはこれらのグスクが断層活動によってできた琉球石灰岩丘陵上に数百メートルの間隔おいて整然と立地しているということである（第１図）。僅か２キロ程の丘陵上になぜこれほどの数のグスクが存在するのか。筆者はこれらの疑問に答えるべく数年前から独自に調査を行い縄張り図作成にとりかかった。

本稿では、これらの縄張り図をもとにしながら旧喜屋武間切に存在するグスク群の構造や歴史的背景について考えることにする。

2、旧喜屋武間切周辺のグスク分布について

旧喜屋武間切のグスク群を見ていく前に糸満市とりわけ旧喜屋武間切に隣接する地区のグスク分布状況をみていくことにしよう。

現在の行政区画である糸満市の市域は間切時代の高嶺（島尻大里）・兼城・真壁・摩



第１図　旧喜屋武間切のグスク分布

文仁・喜屋武の５間切を含む地域である④。間切は琉球王国時代に長期にわたって存続した行政区画の単位であり、現在の市町村の行政区画にほぼ相当する地域である。間切がいつ成立したのかはっきりしないが、歴史的に形成された地域単位が琉球王国の形成発展とともに行政区画として編成されていったと考えられている⑤。

琉球王国時代における地方区画は間切と村に区画されていた。村は1907年まで存続した琉球王国時代の末端の行政単位である。しかし、そもそも村の行政単位は1609年の島津侵攻以後編成された行政単位でありそれ以前は「シマ」という名で呼称されていた可能性が強い。つまり当時の行政の基本単位としての「シマ」がいくつか集合したのが「間切」の名で呼ばれた上位の行政区画だったのである。「シマ」が自然の地形や歴史的な経緯の中で自然発生的に生成発展した社会生活上の基礎的単位であるとすれば、間切は村をいくつか統合した一種の政治上の単位だったということになる。『南聘紀考』⑥によれば、1609年(慶長14) 検地のころの間切と村の数は、国頭の場合が間切９、村100、中頭が間切11、村163、島尻は間切15、村156であった。

現在の行政区画である糸満市の地質は島尻層群を基盤にしてその上に琉球石灰岩が不整合に覆うという構造を持ち、北部の方では琉球石灰岩が部分的に見られるものの島尻層が優越し、南部の方では島尻層は見られるものの琉球石灰岩が優越する地区が多い。特に島尻層と琉球石灰岩から構成されている地区では、断層が縦横に走り急崖を形成しているのでそこに多くのグスクが立地する。また、地形的には、石灰岩台地が断層によって切断され傾動地塊になっているために南側に緩やかな斜面、北側に断層崖という構造となる。第２図はグスクと集落の関連がわかる模式図であるが、市域に含まれるかつての５間切はこの断層崖に沿う形で発達し、傾動地塊の南斜面部に集落、断層崖の急崖にそれぞれグスクが立地するという恰好になっている。

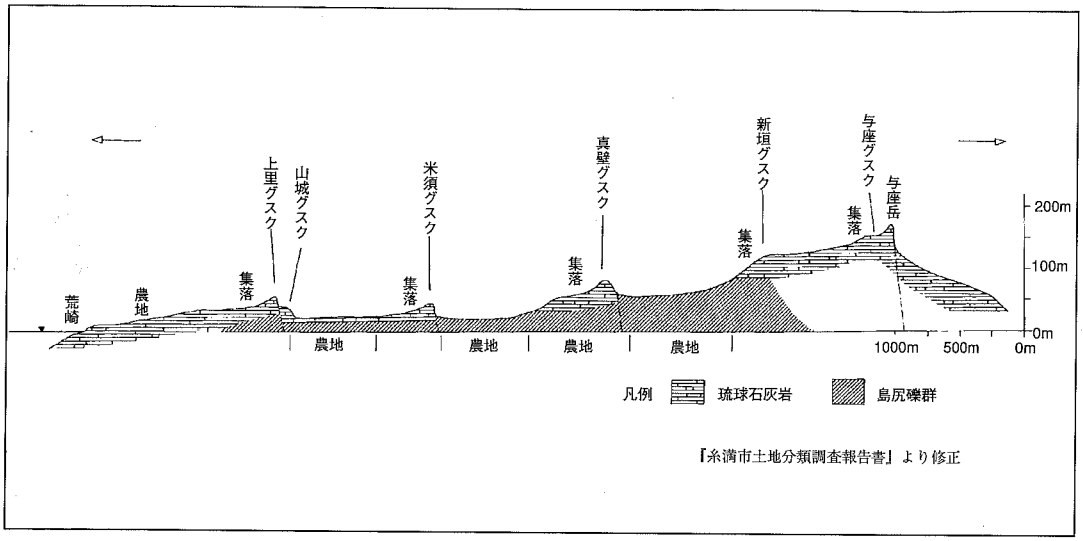
冒頭でも述べたように糸満市はグスクの密集地帯であり、これらのグスクのほとんどが断層崖の上に築かれているが、その分布状況はかつての間切を単位に一つのまとまりをもっているように思える。第３図は糸満市グスク分布図である。この分布図を見るとグスクの多くが各間切の中を走る断層崖の崖上に規則的に立地しているという共通の特徴をもっていることがわかる。

たとえば、旧喜屋武間切の場合は、現在の魂魄之塔の南から喜屋武岬灯台に向かって円弧を描く断層崖に佐慶グスク、上里グスク、山城グスク、東辺名グスク、當間グスク、具志川グスクが整然と並んで分布する。また、その北に隣接する旧摩文仁間切の場合には、高摩文仁グスク、ガーラグスク、米須グスク、石原グスク、波平グスクが東から西に並び、さらに北に隣接する旧真壁間切では、東から西にかけて宇江城グスク、真壁グスク、伊敷グスク、その前方の丘陵上に糸州グスク、安里グスク、仲間グスク、チチャマグスク、フェンサグスクが規則的に並んでいるのである。

３、旧喜屋武間切に分布するグスクの概要

本稿で取り上げるグスクは旧喜屋武間切に分布するグスク群である。この地区の地形は石灰岩の平坦面が断層活動によって切断された傾動地塊の典型例であり、南側が緩やかな斜面となりそこに集落が展開し、北側の断層崖の崖上にグスクが立地するという石灰岩地帯特有な地形を呈している（第２図参照）。

位置的には沖縄本島の最南端を占め、徐葆光の『中山伝信録』には、「首里の南四十里にあり、国の最南端で海岸の辺土である。所属する村県は五。喜屋武・上里・福地・山城・東辺名」と見えている⑦。また、『南島風土記』のなかで東恩納寛惇は、「方音『きゃん』又『ちゃん』やらざもり碑文に『きゃめ』とある。古語に『きゃめ』は『まで』の意に使用されている。或は『きわめ』の轉かとも思はれる。地名もまたこの義に出づ



第２図　グスクと集落関連模式図

るかと云はれ」と記述している⑧。

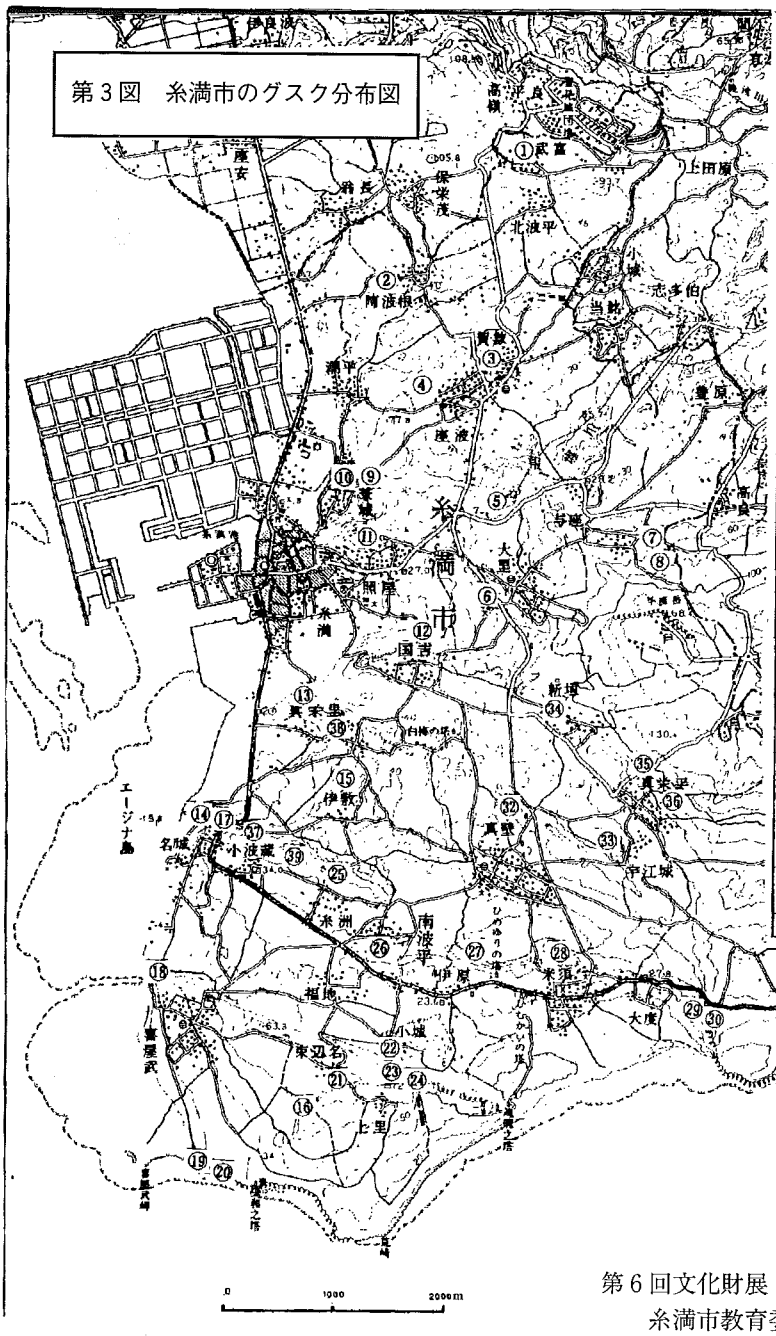
たしかに本地区は、内陸の方からみれば沖縄本島の辺土にあたるところである。しかし、いったん視点を換えて海側からみれば、太平洋に直接望むため外からの接触を受け安く、外に向かって開かれた地域だということができる。

（佐慶グスク）（第４図）

字東里上兼本原にあり、旧喜屋武間切をほぼ東西に走る断層崖の東の端に占地する。グスクがある丘陵の標高は約50mあり、周辺が低い石灰岩台地のため周囲の展望に優れている。特に東から北にかけては、旧摩文仁間切の集落群や農耕地、その間の小高くなった丘の上に点在するグスク群等が手にとるように見え、さらにその北には南部の山々がよく見える。西方は、この佐慶グスクが乗る断層崖の丘陵が次の上里グスクへとつながり、南側には太平洋が望まれる。

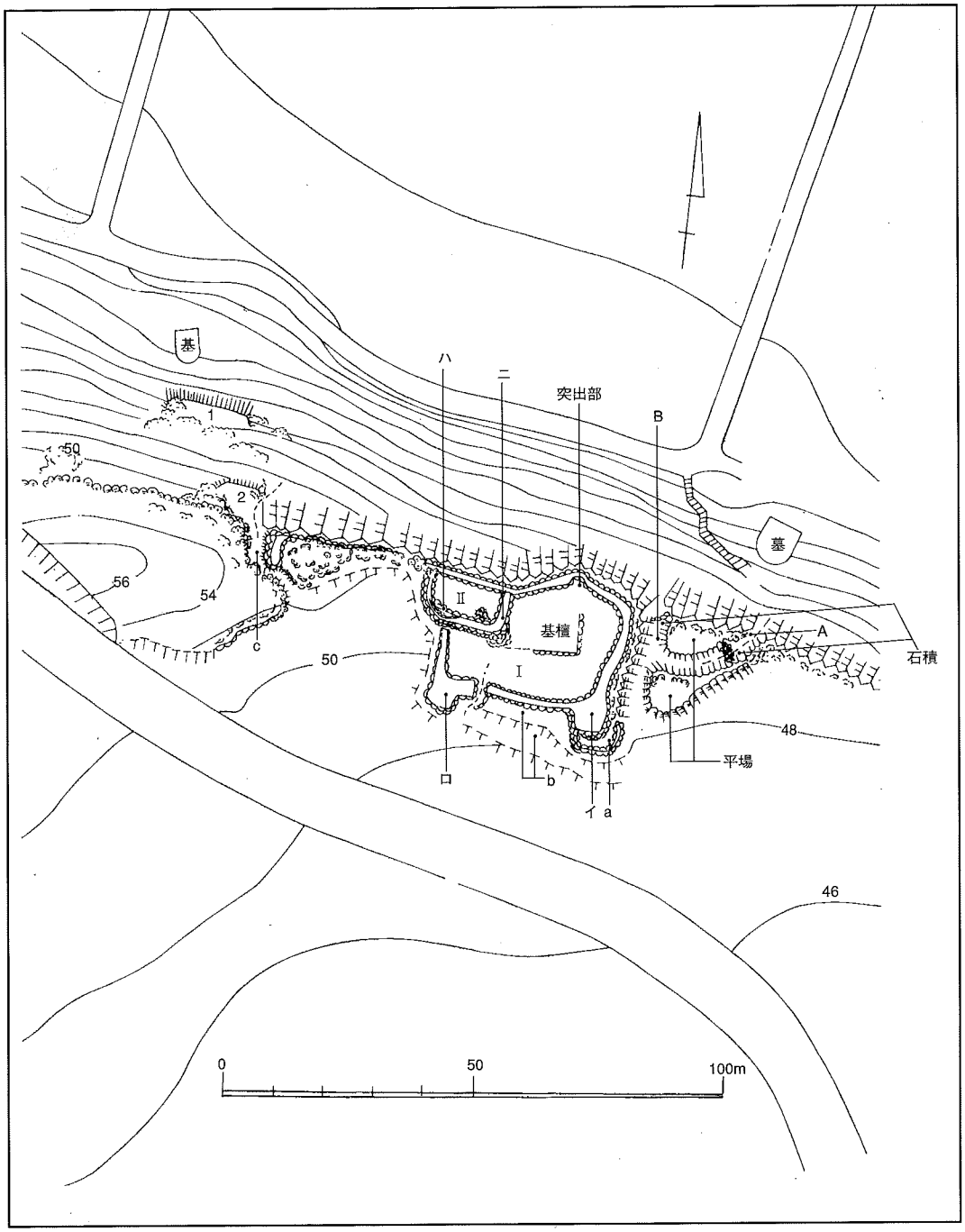
佐慶グスクは断層活動によって形成された急崖を利用して造られている。北側は平地との比高差20mの断崖に面し、この断崖を背にして琉球石灰岩の岩塊を略長方形にめぐらす石築のグスクである。石垣で区画された２つの曲輪（Ⅰ・Ⅱ）と２か所の馬面（韓国では雉と云う）をもつ（イとロ）。

曲輪Ⅰの広さは南北の長さ20m、東西の長さは北側で21m、南側で32m程である。周囲を取り囲む石垣の高さと幅は、北側の断崖上で高さ90cmに幅１m、南側の平坦地に続く



No.	グスク名	所在地
1	武富グスク	糸満市字武富小字仲間田原
2	阿波根グスク	字阿波根
3	賀数グスク	字賀数
4	潮平グスク	字潮平
5	大城森グスク	字大里小字後原
6	南山城跡	字大里
7	与座グスク	字与座小字東原
8	上座グスク	字与座小字上座原
9	奥間グスク	字兼城小字門原
10	兼城グスク	字兼城
11	照屋グスク	字照屋小字内原、御嶽原
12	国吉グスク	字国吉
13	真栄里グスク	字真栄里
14	フェンサグスク	字名城
15	伊敷グスク	字伊敷
16	当間グスク	字喜屋武小字大石原
17	チチャマグスク	字名城
18	喜屋武古グスク	字喜屋武
19	具志川城跡	字喜屋武
20	カタハラグスク	字喜屋武
21	東辺名グスク	字東里、旧東辺名
22	山城グスク	字山城
23	上里グスク	字東里、旧上里
24	佐敷グスク	字山城
25	糸洲グスク	字糸洲小字前原
26	波平グスク	字波平
27	石原グスク	字伊原
28	米須グスク	字米須小字東田原
29	ガーラグスク	字大度
30	オドサトグスク	字大度
31	摩文仁グスク	字摩文仁（平和祈念公園内）
32	真壁グスク	字真壁
33	字江城グスク	字字江城
34	新垣グスク	字新垣小字新垣原・後原
35	真栄平グスク	字真栄平小字後原
36	ブリ原グスク	字真栄平
37	仲間グスク	字小波蔵
38	テングスク	字真栄里小字ウチル原
39	安里グスク	字糸洲小字奥間原

第６回文化財展『糸満市のぐすく』
糸満市教育委員会　1984年　より



第４図　佐慶グスク（當眞作図）

面では現在高で80㎝、幅２～３mである。この曲輪の中央部には7,6m×11m、高さ約40～50㎝の基壇がある。居住地化された場所であろう。基壇前面の面石は乱れているものの僅かに切石が残っている。基壇の前は50～60㎡程の広さを有し広場になっている。この曲輪Ⅰの四囲は北側の崖上も含めて石垣で囲まれているが、特に南側両隅の屈折部には城壁と直交するように突出させた馬面が認められる。東南角の馬面（イ）は保存良好であるが、西南角の馬面（ロ）は石垣が崩れたりして保存が悪い。状況の良い東南角馬面（イ）の石垣上面が4,6m×５mの正方形、高さは約３mある。この馬面の前面には（a）にみるような鉤状になった石積みが接続している。遺構の機能については判然としない。虎口（写真３）は南西に開き食い違いが認められる。馬面（ロ）からは横矢がかかる。南側城壁の外には高さ70～80㎝程の雛段状になった削平段が取りついている（b）。敵兵が直接城壁石積に取り付けないようにするための工夫である。

曲輪Ⅰの西側に接続する曲輪Ⅱは東西の長軸で12m、南北の広いところで6,3m、狭いところで4,3mの略楕円形の小曲輪で居住空間と考えられるほどの広さはない。北側の急崖を背にして平地部に面しているが、平地に面する石垣（写真２）の高さは外側で5,5m、内側で2,5mを測る。また、この部分の石垣の上部は２mもあり城兵たちが十分に動きまわれる幅である。特に注意を引くのは、石垣上部に武者走り状の遺構が見られ攻者に弓を引くための足場（ハ）が用意されていることである。ところで、曲輪Ⅱには虎口が認められない。現在、この曲輪に入るには南東隅の内と外に崩れたような状況を示す乱れた石積みがありそこをよじ登るようにして出入可能である。ここに梯子を掛けて出入りをしたのか、あるいは粗末な石階段がとりついていたのか、現状では判断しかねる。

曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの比高差は約２mもあり、もし曲輪Ⅰに敵兵が侵入したとしても曲輪Ⅱから防戦できるような態勢がとれる。だからこそ曲輪ⅠとⅡの間にある石垣（ニ）も高く、しかも幅の厚いものになっているのであろう。そもそも曲輪Ⅱには虎口がなく、しかも周辺が高さ２～３mの城壁で囲まれていて居住空間としては考えられないことから、機能についてなかなかはっきりしなかった。しかし、今回、縄張り図作成の過程で主郭部に相当する曲輪Ⅰと曲輪Ⅱとの関連および両曲輪の構造上の比較など遺構を読み取ることによって、この狭い空間部の曲輪Ⅱが曲輪Ⅰに侵攻した敵兵を抑えるのに都合よくできたものだということに気付くことができた。このような構造は、後述する上里グスクの主郭部とその周辺の曲輪の関係にも看取されるところである。つまり、今まで謎に包まれていた曲輪Ⅱの機能については、居住地化された曲輪Ⅰに侵入してきた敵に対し、あくまで徹底交戦を構えるための施設であると認識されるということである。

さて、佐慶グスクの構造を見るとまだまだ面白いところがある。それはA・B・Cであ

る。その3か所は何れも断層活動によって琉球石灰岩丘陵に亀裂が入った場所であり、縄張り図からもわかるように、丘陵の上部台地と下方の平地の間は唯一この亀裂部分を道とすることで往来が可能となる。亀裂がないところは、琉球石灰岩が切り立つ断崖をつくっているため上・下の往来は不可能である。

曲輪Ⅰの東側には2か所の断層崖亀裂が認められ堀切状（A・B）になっている。この亀裂部分を道に利用することで上方台地と下の平地は行き来ができるわけであるから、AとBに見える石積みは明らかにこの道を遮断するために積まれた施設だったと考えられる。特にAは出入可能の木戸になっていたのではなかろうか。旧喜屋武間切の領域は丘陵下方の平地部分をも含んでおり、領民たちにとっては日常的に利用される道だった可能性がある。もし、隣り村との間で争いがおこったときには、Aを上って丘陵上に避難したあと守備を固めることで要塞化できるので防御上優れた場所になりえるのである。仮にAが破られ交戦したとしても、攻者は左右の岩の上の平場と正面の城壁の上から十字砲火の下に置かれることになるので守りは完璧である。

次はCを見よう。ここは曲輪Ⅱの西にあたり、曲輪Ⅱの先端部から屏風状にのびた岩の上に、特に亀裂が見られるところを中心にしてきちんとした野面の石積みが認められる。Cの周辺では断層崖が急崖でないため丘陵上にのぼり安くなっている。そのため斜面部に削平地1をおき、さらにその上にもう一つのバルコニー状の平場2を造り下方から上ってくる攻者に対して抑えが効くように工夫されている。

以上、佐慶グスクの構造をみてきたが、つぎにその特徴点について考えてみよう。
特徴の第一は、琉球石灰岩でできた野面積みによる石築だということである。南部のグスクは一部の例外を除いてほとんど石築であるが、石が後世の建築・土木用骨材に使用されるなどして大きく改変を受けているところが多い。この佐慶グスクは、そういった破壊をほとんど受けず、沖縄戦末期激戦地となった地域であったにもかかわらず、城壁のほとんどが崩壊を免れ、往時の姿をよく止めており保存良好なグスクである。

特徴の二つ目にあげられるのが、城壁からの側射をねらった馬面と呼ばれる（韓国では雉）突出部があることや石垣上部に幅をもたせ城兵たちが動き回れる足場が確保されていることと同時に防御上の要となる城壁に武者走りが設けられていることなど、城として優れた構造をもっていることである。沖縄のグスクは高い石垣によって囲まれいるから、曲輪の中から外を見ることも守ることもできない。防戦の場は必然的に城壁上に限られるのであるが、本グスクの場合規模が小さいながらもこういった城としての機能を有する遺構が随所に認められる。

第三の特徴は、このグスクは二つの曲輪から構成されているが、居住空間はたった一

か所しか認められずしかもあまり広くないということである。確かにこの居住地化した空間には基壇らしい遺構が認められるものの、そこにかつてあった建物は、小領主的存在の人がそこを拠点に領民支配を行うような施設ではなく、領主よりも下級の人々、たとえば家臣クラスか、城を守備する将兵の臨時的な居所だったことが考えられる。あるいはまた、倉庫のようなものが建っていた可能性もある。城内に遺物包含層が認められないのはそのことを反映しているのかも知れない。

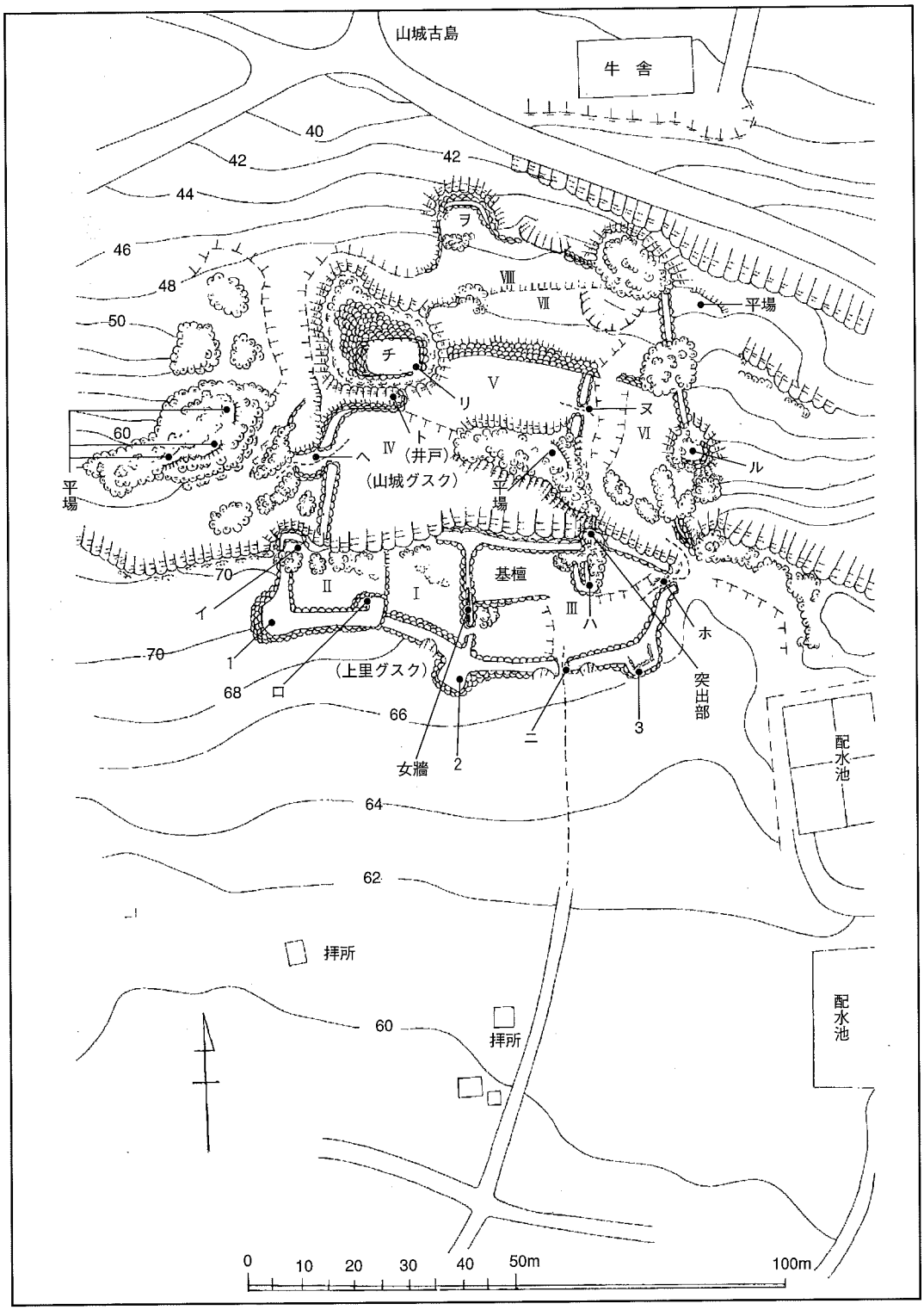
このグスクの第四の特徴は、断層崖の崖上の台地と崖下に展開する平地との間を往来する通路（ここでは断層活動によってできた石灰岩の亀裂が通路となっているので亀裂路と呼んでおく)、A・B・Cの亀裂路を抑えることにあったということである。換言すれば、亀裂路をグスクの中に取り込むことによって、断崖の上と下をつなぐ路を抑える目的でグスクが造られているということである。亀裂路を抑えるということは、そのグスクで籠城を行えば路は当然遮断され、同時に断層崖の地区全域が要塞化することになる。通常は崖下の平地に農耕地があるので往来できるようにしているが、一旦事が起これば、この亀裂路を封鎖することによって断層崖の上に展開する領域の安全が保障される。つまり、このグスクの存在目的は、この地域を領有する小領主が人民支配のための本城として築城したというよりも、この断層崖上の戦略路を重視した集団が自らの領域を守備する目的を持ち、支城的機能を期待して築城したものだったということである。

(上里グスクと山城グスク)（第５図）

上里グスクは佐慶グスクと同一丘陵上の300mほど西にあり、また、その断崖直下には山城グスクが位置している。前者の上里グスクは崖上を利用しながら琉球石灰岩の自然石を巧みに積み上げて築かれており、後者のグスクは断層活動によってできた石灰岩の巨石群を上手く利用しながら築かれている。両グスクは名称こそ違っているものの別々のものではなく、断層崖の上と下とを有機的に組み合わして造られた一つのグスクである⑨。地元の人たちは、崖上の上里グスクのことを「イー（上) グスク」、下方にある山城グスクを「シチャ（下）グスク」と呼んでいる。

崖上にある上里グスク側は、東から西側に３～５mの琉球石灰岩自然石の石塁が巡り、平地部に続く南側の緩やかな面には３つの馬面（雉）をおいている（１・２・３)。石塁の東西の端は、いずれも痩せ尾根になったくびれ部に築かれているが、特に西側では尾根続きの至近距離にある高所を意識してそこには高さ５mもある馬面（写真４）をおいて城の守りを固めている。

曲輪Ｉは、標高69mを測り、東と西側は高さ３m程の自然石野面積みの石垣によって囲



第５図　上里グスクと山城グスク（當眞作図）

まれ、北は断崖となる。また、西には50～60cm程高くなって曲輪Ⅱがある。東側の石垣の上には、曲輪Ⅲに向かって女牆が設けられている（写真６）。この曲輪の南南東、曲輪Ⅲと接する城壁には馬面（２）が取りついている。曲輪Ⅰは東西21m、南北16mの広さを持ち、特に北の断崖側は平坦に造成されているが、南側の城壁に近いところでは人頭大の自然石が無造作に転がっていて足場が不安定な状態になっている。地拵え部分が浸食を受けたため、地拵えに使った石灰岩が剥き出しになっているためであろう。この曲輪Ⅰが主郭と考えられる。

曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰとの比高50～60cm程で、大きな自然石を一段づつおいて区切りにしている。南側と南西側は自然石の野面積みの石垣、北側は断崖となりそこには山城グスクの石垣が取りついている。この曲輪の西側尾根つづきに73mの高所があることから、この高所を意識して西から南西側の城壁はとくに厳重にされ、馬面（１）をおいている。さらに北西側崖上の自然岩突出部（イ）には、約１m程の高さで自然石を積み上げた半円形状の石垣遺構が認められる。この遺構は、直下にある山城グスクの城壁に取りつく攻者に対して上から狙えるように工夫されたものである。この曲輪内はほとんど自然地形のままに置かれているのが特徴である。曲輪の東南隅に半円形状の石積み（ロ）が見られるが、後世のものかどうか判然としない。

曲輪Ⅲは、北側が基壇状に一段と高くなり（南との比高は約80cm）南側が低くなっている。基壇状の高い部分に何らかの建物があったと仮定すれば、南側の低い部分が前庭部ということになる。その関連については発掘調査を待って検討されよう。基壇状の高くなった東に隣接して石積みの遺構が認められる（ハ）。現在、中央部が溝状に窪んでいるが、この窪みは沖縄戦の時のものであり、元々は高く積み上げられた石積み遺構だったものと思われる。（ハ）の上に立つと曲輪内をしっかりと見通すことができると同時に虎口が真ん前に見える。そのことから、この遺構は虎口や曲輪内を守備するために置かれた可能性がある。曲輪Ⅲ南側石垣のほぼ中央付近には幅１mの石垣の切れめがあり両側面には方形状に整形された大きな切石が立っている（写真５）。上里グスクの虎口である（ニ）。この虎口の東側11mに馬面（３）が見られる。虎口から馬面（２）までの距離が約19mあり、馬面２と３から虎口に横矢が可能である。曲輪Ⅲの東端は石垣が途切れておりそこにも虎口があったと思われる（ホ）。この虎口を出て左に折れると石積みがあり、その石積みを下って行くと崖下の山城グスクに至る。ここは上里グスクから山城グスクに行ける唯一の場所であるため両グスクを往来する通路などが取りついていたと思われるが、その形状については、たとえば石の階段だったのか、それとも石垣の上を歩いて渡ったのか石積みの崩壊が著しく現状では判然としない。

次に山城グスク側の構造をみることよしよう。

崖下に位置する山城グスク側には断層活動によって崩壊した石灰岩の巨岩が点在しているために一見曲輪を造る空間部が確保できないようにみえるが、中に入ってみると巨岩と巨岩の間には以外に広い空間があり、曲輪はそういった巨岩と巨岩の間の空間を利用して造られている。曲輪Ⅳの場合は、北から東側にかけて点在する巨岩によって塞がれ、南側は切り立つ岩（上に上里グスクの曲輪がある）で壁を造り、西側は幅２m程の石垣によって取り囲まれた曲輪である。西側の石垣に虎口が開いている（ヘ）。現状ではブッシュに覆われはっきりしないが、ここの虎口は護城牆と呼ばれる鉤状になった特殊の工夫がされていたのではなかったかと思われる。この曲輪Ⅳの北北西に巨岩があり、曲輪Ⅳとの間に幅３mの隙間ができ窪地になっている（ト）。現状では水は溜まってないが、「降りガー」といわれる井戸に形状が一致し、周辺は石積みになり、不透水層となる島尻泥岩の層が巨岩の下に剥き出しになっている。グスクの井戸であろう。

井戸を隠す形の巨岩の上は、かなり下の部分から頂上部にかけて自然石が高く積み上げられていて、最高所では約20㎡程の小曲輪を造っている（チ）。この小曲輪からは城内・城外を完全に見通すことができ、指令塔的な施設だった可能性がある。また、この小曲輪南に切石積みの虎口と見られる開いたところ（リ）が認められる。おそらく、ここから縄梯子などをつかって下の曲輪と上り降りをしたのであろう。

曲輪Ⅴは、曲輪Ⅳの北に展開する細長い曲輪で西側が前述の巨岩に接し、北側は曲輪Ⅶに石垣を境に接している。曲輪Ⅶとの比高差は４m程である。また、東側は石垣によって囲まれいるが、その中央部には曲輪Ⅵとの間に通じる虎口が開いている（ヌ）。

曲輪Ⅵは自然地形をよく残しているが、東側の城壁近くでは狭い平坦地が確保されている。この平坦地の東側の石垣を追って上にいくと巨岩に接する。この巨岩の上には石垣で周囲を囲んだ見張台が築かれている（ル）。

曲輪Ⅶは東西に細長い腰曲輪で、西側は巨岩に接し東側は巨岩と巨岩の間を利用して石垣を築き城壁となす。曲輪内は平坦となっており造作の手が加わっているように思える。

曲輪Ⅷは、曲輪Ⅶの北に接し、約60～70㎝程低くなっている。この曲輪の北北西に小高くなった大岩があってそこにも周囲を石垣で囲んだ見張台（ヲ）が築かれていて、山城古島跡を見据える恰好になっている。

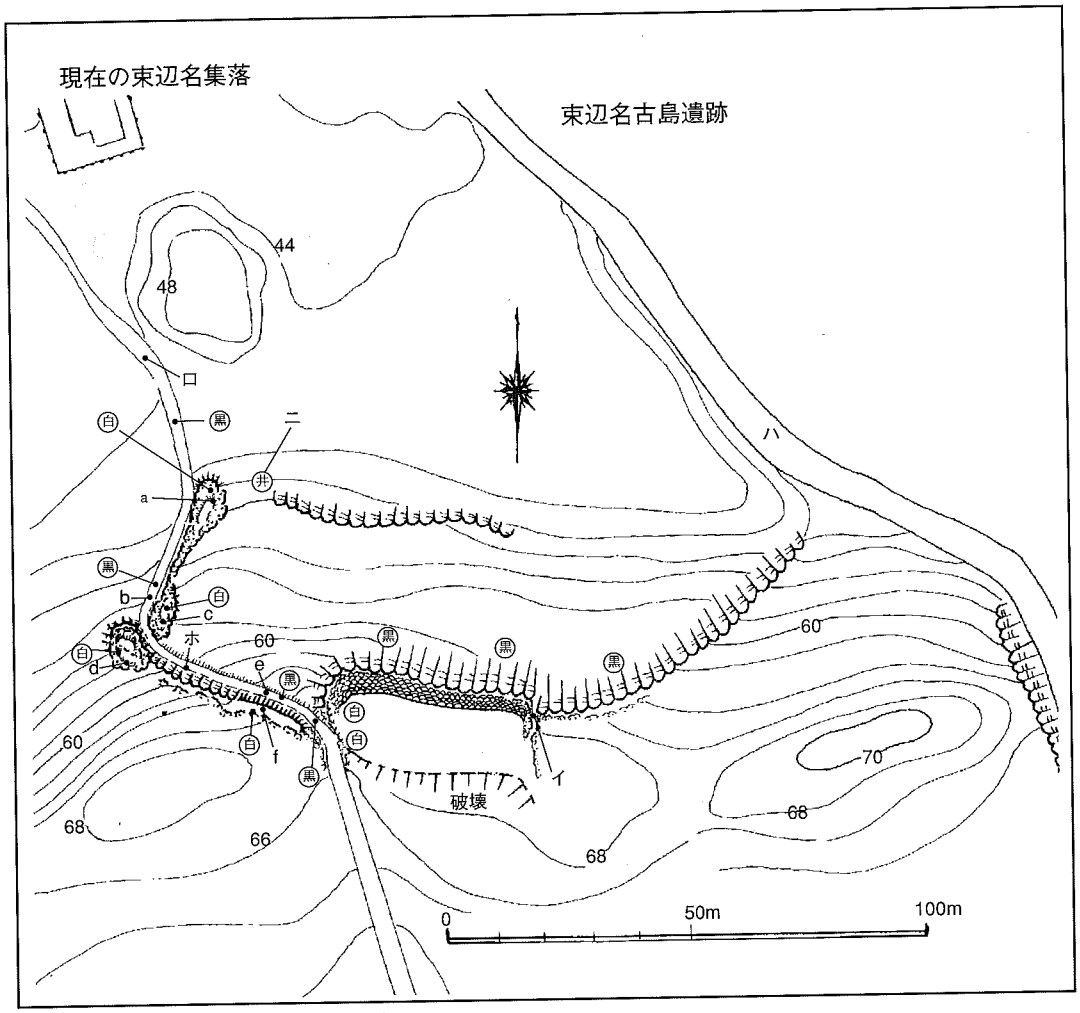
なお、上里・山城グスクは琉球石灰岩の自然石を野面に積みあげて築かれたものであり、佐慶グスク同様沖縄戦末期激戦地となった地域であったにもかかわらず城壁のほとんどが残っており非常に保存良好なグスクである。

つぎは上里グスクや山城グスクの縄張りの特徴について考えてみることにする。
特徴の第一は、上里グスク南側城壁の平地に続くところに城壁からの側射をねらった馬面がほぼ等間隔に３つ置かれていることである。馬面は、石垣が直線であった場合に石垣の真下に迫る敵を直接攻撃することができないので、城壁下の敵を斜めから攻撃することができるように、城壁を半円形か正方形に突出させたものであり、日本の城などでは横矢がけとよぶ。１・２・３は馬面の典型例であるが、イも琉球石灰岩の上に半円形に石垣を突出させており馬面の機能をはたすものである。山城グスクの巨岩の上に築かれたルとヲもこの種のものとして理解できよう。
第二の特徴は石垣や巨岩などで防御された平場（曲輪）の数が多くかつ複雑となり、曲輪Ⅰを中心に求心力の取れた曲輪配置を取っていることである。たとえば、上里グスクの場合は基本的に曲輪Ⅰを中心に曲輪Ⅱと曲輪Ⅲによって構成されているが、曲輪Ⅲをさらに細かく見ると、基壇と考えられる高い部分とその下の庭の部分、および東側に石灰岩の段差のついた２つの平場の部分に分かれていて複雑な様相を呈している。また山城グスクでは曲輪Ⅳと曲輪Ⅴを中心にその下方に２段の削平段が続き、外壁となる岩の上には半円形の馬面（ヲ）を配置し、さらに城の中央部にあたる巨岩の上を利用して指令塔的な小曲輪（チ）を築くといった構造になっている。したがって、この上里グスクや山城グスクは、構造上からもあるいは規模の上でも、佐慶グスクや後述する他のグスクに比べてきわだった特徴を有するグスクだということができる。城内に井戸（ト）を有していることも大きな特徴点である。

以上の特徴からみると、本グスクは旧喜屋武間切を領有する小領主的存在の人が、本グスクを拠点にして領民支配を行うための城であった可能性が強い。つまり、上里グスクと山城グスクは旧喜屋武間切を領有する按司の本城として理解することができるのである。上里グスクに接する南側の平地にはグスク時代の遺物が散布し、さらに山城グスクに接する北側の斜面には山城古島遺跡やカニマン御嶽など多くの拝所群が点在する。この両グスクの周辺にはこのようにグスク時代の集落と見られる遺跡や拝所群が存在し、グスクと同時代の村の遺跡がセットになっているところも大きな特徴である。そのことからもこのグスクが本城としての機能をもっていたことをうかがうことができよう。

東辺名グスク（第６図）

この東辺名グスクは、上里グスクから丘陵つづきの西方およそ550mにある。グスクは標高72mの丘陵上にあり、北は断崖を背に南側は平地に接している。グスクと関連のある東辺名集落は、グスクの北側断崖下の平地に位置している。現集落の東側畑地一帯に



第６図　束辺名グスク（當眞作図）

は、一部現集落と重なりながら束辺名古島遺跡と呼ばれるグスク時代から近世にかけての集落跡が広がっている。古島遺跡とグスクとの比高差は25～30m、古島からは　仰ぎ見るような恰好でグスクが立地する。

ブッシュをかきわけての表面観察では、断崖の直上に琉球石灰岩の自然石を野面に積み上げた石積みが確認される。この石積みは、人頭大の自然石を巧みに積み上げ高いところで４mを測り、野面積みでありながら緩みや孕みも少なく石と石の間がきちんと噛み合った状態でよく残っている。ところが、この石積み以外には他の三方の石積みがまったく確認できない。どうしたことだろうか。それは、南側につづく平地部分からブルトーザーが入り、グスクの石積みが根こそぎ破壊されたからである。現在、グスクの主

体部には天地返しになった土石が雑然と積み上げられブッシュに覆われたままになっている。おそらく農地開発等でブルを入れたものの重要な遺跡ということに途中で気付きそのまま放置したのであろう。事前に市の教育委員会と協議をしていたら破壊を免れていたかと思うと残念でならない。後述するように、このグスクが小規模のグスクだったこともあって、寸時にして壊されたのであろう。惜しいことをしたものである。
現在残っている石積みや周辺の地形からみてこのグスクの規模は非常に小さいものだったことが理解される。断崖上の東西の石積みの端は、いずれも断層活動によってできた亀裂（イ）で区切られているためその長さを東西22mとしておさえられるし、南北の長さについては、北の断崖上の石積みを起点に南にいくらのびていたかということであるが、石垣が破壊されているために現状でははっきりしない。しかし、地形の状況や地表面の起伏の様子からして南北十数m程の長さだったことが予想される。したがってこの東辺名グスクの規模は東西22m、南北十数m程の単郭のグスクだったことがわかるのである。

前述したようにこの東辺名グスクの東西の端は、いずれも断層活動によってできた琉球石灰岩独特の亀裂で区画された位置に築かれている。この石灰岩の亀裂は自然にできたものだがわずかに手を加えることによって防御のための堀切に利用することができるし、こうした琉球石灰岩の亀裂を利用した防御の堀切をもつ例は、石灰岩地域の他のグスクでも多く見られる。

ところで、沖縄の他のグスクでもそうだが東辺名グスクの調査をするにはブッシュをかきわけながらそれこそ地面をはうようにして踏査しなければならないのでかなりの覚悟がいる。筆者は冬場の寒い日を見計らって十数回の現場踏査を経てやっと第６図のような縄張り図を完成することができた。沖縄のグスクは一年を通して深いブッシュに覆われ、しかも猛毒なハブが生息しているためなかなか容易なことではない。こういった状況下での調査であるため重要な遺構を見落としたり、気が付かなかい箇所も多いと思われる。いつも感じることは、もっと多くの研究者が実際にブッシュをかきわけてグスクを歩き、遺構群を追っていけばグスク研究がもっと進展を見せるはずだということである。

ところで、第６図をみながらもう少し東辺名グスクの構造を見ることにしよう。東辺名グスクは断層崖の上に築かれた規模のきわめて小さな単郭のグスクである。この東辺名グスクの東と西の丘陵つづきには、ほぼ同じ標高を有する峰があるにもかかわらず、何故この位置に占地したのかということである。尾根つづきの東西の台地を城域として取り込めばもっと広く、しかも強固なグスクが築城できたはずなのにである。この疑問

を解く鍵はどうもグスクのすぐ脇を通る「メーガー道」（ロ）と呼ばれる古道にありそうである。

東辺名グスクの東西の石積みの端は、いずれも琉球石灰岩の亀裂を利用することで築かれているということはすでに述べたとおりであるが、そのなかでもとくにグスクの西端は断層崖が交互に交差するため、その隙間が道路幅程の広さを有し、且つ、切り壁のような断崖を形成せず比較的緩やかな地形になっている。そのためこの隙間を利用して丘陵の上と下を往来する古道が古くから造られていた。グスクの東側に琉球石灰岩丘陵を掘り切って現在の市道（ハ）が開通するまでは、この古道が丘陵上の集落と下の集落との唯一の道路だったようである。東辺名集落からのグスクへの城道は、当然この古道が使用されていたのであろう。古道は城道と重なるようにしてグスクの中に消えていく。

東辺名の集落からやがてグスクの入口付近に差し掛かろうとする古道の東側の脇に「メーガー」と呼ばれる井泉（ニ）があり、そのことから地元では古道のことを「メーガー道」あるいはグスク直下の坂道になったところを「メーガー坂（びら）」（ホ）という。また、東辺名グスクのことを「メーガーグスク」とも呼んでいる。⑩

このグスクの直下を通る「メーガー道」の意味を考えることによって、東辺名グスクの築城目的がさらにはっきりしてくる。

東辺名グスクの構造上注目すべき点は、前述したように「メーガー道」という古道を取り込んでグスクが造られていることである。丘陵下方から丘陵上に出るには、どうしてもこの古道を通らなければならない。この古道以外はすべて断層崖の切り壁によって遮られているからである。したがって、この古道を抑えるようにして作られた東辺名グスクは一種の関所的機能を持っていたことになる。たとえば、この城と敵対する集団（すぐ北には摩文仁間切の勢力があり、さらに北には内陸部の勢力がある）が北の方から進攻してきたとしよう。この時、グスクで籠城を行うことによって道路は使用ができなくなる。つまり、東辺名グスクはこの古道を封鎖することを目的の一つとして作られていると考えられるのである。

第6図を見ながら「メーガー道」と東辺名グスクの関係について分析してみよう（㊐を城兵、㊗を敵兵としておく）。

まず、北側の丘陵下（ロ）から敵兵が上ってきたとしよう。それを岩の上から見ていた城兵は、ただちに敵の侵攻を後方の城兵たちに伝えると同時に、岩の上にある小平場 a から防射する。敵兵が a の岩の下を突破して b まで進入した。なおも a の城兵たちは防射をつづけ、敵兵の背を射る。また、同時に c と d の岩の上の小平場からも防射する。すでに b の狭い通路に来た時点で敵兵は十字砲下におかれることになるので苦戦を強い

られる。苦戦を突破した敵兵はついにグスクの石垣が見えるｅまで進入してきた。城兵は右のｆの小平場から横矢をかけてくるので敵兵の進軍は困難をきわめる。この時、敵兵は左側の断崖下にも兵を分散する。しかし、その断崖は険しく、さらに断崖上には４ｍの高さの石垣が積まれいるから城内への侵入は不可能である。敵兵がなおも前進していよいよグスク直下まできた。城兵はグスクの石垣の上からの防射とｆからの背射。これを突破されたら終わりであるが、この東辺名グスクがたとえ落城したとしても丘陵上のエリアは広く、そう簡単には丘陵上に立地している喜屋武間切の小領主の本城までは敵兵の手は届かない。

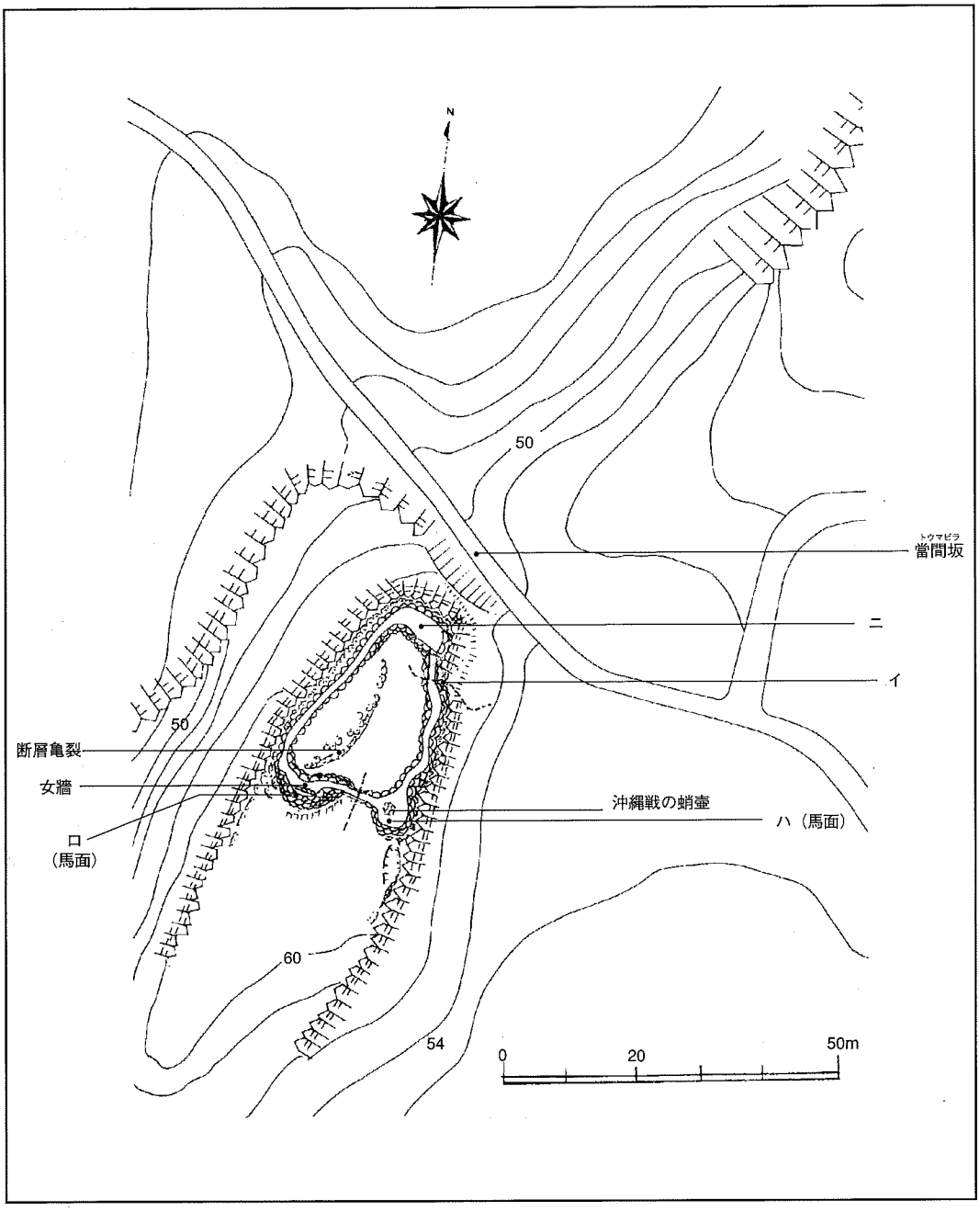
當間グスク（第７図）

當間グスクは、東辺名グスクから丘陵つづきの南西およそ350ｍに位置する。標高62ｍの丘陵上に築かれている。北と東西の三方は断崖となり、南側一か所のみが同一丘陵の峰へと連絡している。このグスクの北側直下には丘陵下から丘陵の上に通じる路が開いており、地元の人たちはこの坂路のことを當間坂（とうまビラ）と称している。現在は道幅６ｍもある立派な舗装道路になっているが、それは近年になって改修されたもので、戦前の道は道幅約１～２ｍの荷馬車がやっと通行できるほどの小さな道だったようである。

グスクの東北東側の崖が緩くなったところ（イ）には石垣が崩落した箇所があり、現在はそこを攀じ登るようにして城内に入ることができる。城の規模は南北約50ｍ、東西の幅が広いところで約40ｍを測る。現状では城内のほぼ中央に断崖層特有の亀裂が南北に入り凸凹面となって自然地形のように見える。しかし、ブッシュをかきわけて城内を注意深く観察すると亀裂間に石灰岩の岩塊が敷き詰めているのが確認でき、かつて城内がきちんと地拵えが行われていたことを読みとることができるのである。

城石垣は断崖の直上に琉球石灰岩の自然石を野面に積みあげてある。グスクの北から西にかけては高さ約１ｍ前後の低い石垣、東側では高さ２ｍ前後の比較的高い石垣を積み上げてある（写真８）。それは北から西側の断崖面が急峻で高く、東側の断崖面が低いためである。また、南側の峰続きのところでは石垣を最も高くし、とくにロの石垣は3,5ｍを測る（写真７）。さらにロの石垣の上には女牆を設け、防御的意図がはっきりあらわれている。ところでこのロは一種の馬面であるが、その東の反対側にもロに対応する形の突出部ハが見られる。現在、その中央部には沖縄戦の際の蛸壺が掘られ旧地形が著しく損なわれているもののもとは櫓台の跡であろう。

虎口は馬面ロとハの間に取りついていたものと思われる。事実、虎口が開いていたと



第７図　當間グスク（當眞作図）

見られる中心部には石垣が無い。峰続きを侵入してきた敵兵が虎口に殺到するとロとハの両脇から相横矢が掛かる仕掛けである。

さて、當間グスクは幅が狭くなった丘陵の上に占地しているためそのままでは広い空間を作りだすことはできない。したがってこのような占地形態に規定されたため城内は比較的小さく、城内で日常生活が営めるようなグスクでないことはその規模から明らかである。糸満市教育委員会が行った遺跡詳細分布調査の中で、「グスク内よりの採集遺物はなく、前方の畑より須恵器（カムィ焼のこと）、磁器等が2・3点採集されたのみ」⑪と報告されているとおり、城内から当時の遺物がほとんど採集できないのもそのためであろう。

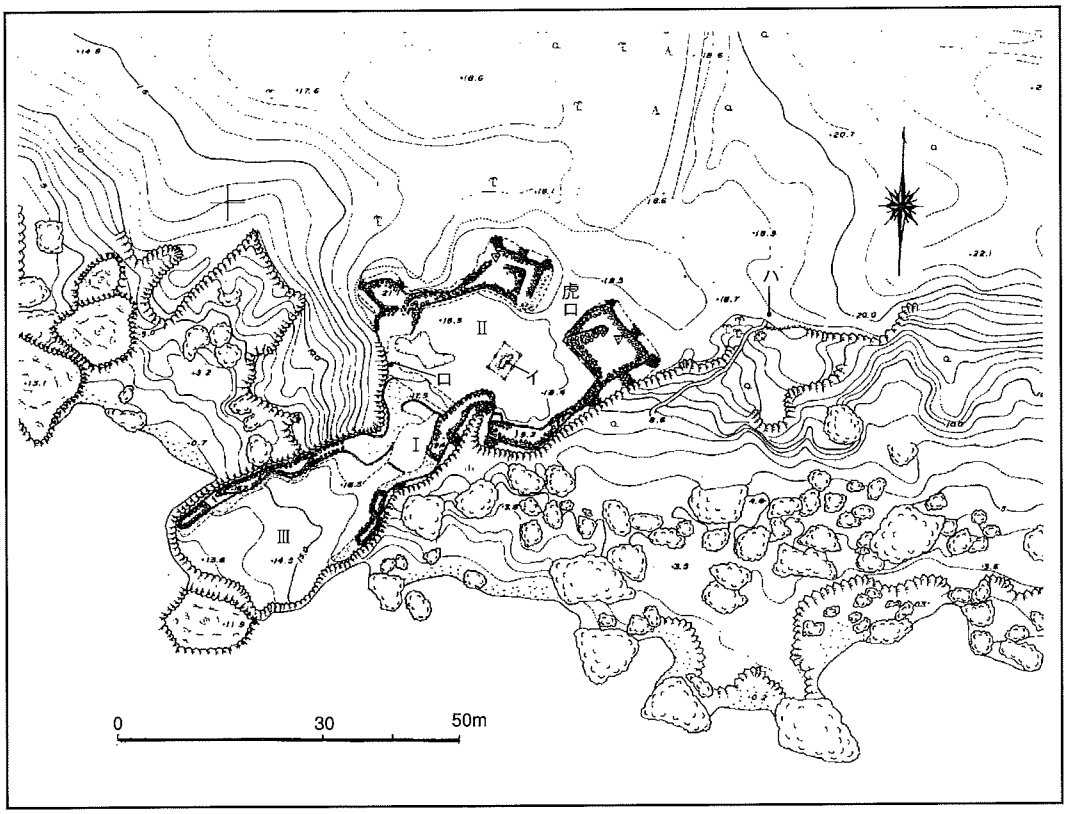
では、この當間グスクはどういう機能をもって築城されたグスクであろうか。どうも前述した東辺名グスク同様、丘陵下と丘陵上を通行する通過地点を抑えて立地しているところにこのグスクの機能を解く鍵が隠されているようである。グスクの直下を通る通称「當間坂」は現在こそ幅の広い舗装道路に改修されているが、かつては荷馬車一台がやっと通れる広さであり、それもグスクの直下を通っていた。グスク北の先端部（ニ）は、石垣の幅が厚く櫓台になっていて「當間坂」を登り降りする人々の動静をつかむのに都合がよい。

したがって本グスクは丘陵の下と上を通過する要衝に築かれていることでは東辺名グスクとも通ずるものがあり、当時の生産基盤であった農耕地の確保と、喜屋武間切内の丘陵を上下する道をおさえるための城として築かれたことがわかる。

具志川グスク（第8図）

具志川グスクは太平洋に突出した海岸断崖の上にある。北東－南西を長軸にして、東、西、南は絶壁となって海に臨んでいるが、北から東北東にかけては内陸に接して平坦になっていて虎口すなわち城門がそこに開いている。この城は、海岸に突出する断崖上に築城された特異性と沖縄本島の南端という地理的位置、さらに城壁の石積みが良く保存されていることで国の史跡に指定されている⑫。

伝承によれば、久米島の具志川城主真金声按司が伊敷索城の按司の二男真仁古樽に攻められて落城した際に島を脱出してこの地に逃れ、故郷と同じ名の具志川グスクを築いたといわれている⑬。現在では久米姓を名乗る一門がその末裔とされ、城内には近くの字喜屋武に在住する久米門中の拝所が祀られ、その信仰は今でも厳格に守られている。その伝説にふさわしく、久米島の具志川グスクと同じような立地と構造を有し、偶然の一致とはいえない感をいだく。また、時期的には城内から採集される貿易陶磁器の年代



第８図　具志川グスクの地形測量図（糸満市教育委員会提供）

観が14～15世紀頃であるということも一致するところである。

ここで、両城が類似するところについてもう少し見ることにしよう。まず占地の上では海上に突出し、直接交易権の確保を狙って築造されていることである。二つの城とも、当時、貿易を求めて頻繁に海洋を航行していた中国の貿易船を引き込むのに絶好の場所に立地し、海洋貿易の中継拠点の城というイメージを有しているということである。さらに、三方が断崖に囲まれ、唯一陸続きに対する石垣は高く、さらに城門の両脇に馬面を置いて防備を厳重にしていることも両城が類似するところの一つになっている。

本項の具志川グスクは、海岸に突出した断崖上の岩山に琉球石灰岩塊の野面の石積みを巡らして城壁としている（写真10）。石積みは全体としてかなり崩れているが、断崖上は低く、陸地に続くところは高く積み上げられ、最も高い石積みで５～６ｍを測る（写真９）。虎口は前述したように内陸に続く北東に開けられているが、城門の幅が広く、門の両脇の石垣は高く積みあげ切石を用いた痕跡を僅かに残しているものの基本的には野面積みである。この両脇の石垣は特に馬面となっていることも特徴点であり、防備を厳

重にしていることがうかがえる。

城内は三つの曲輪からなり城門を入ってすぐに曲輪Ⅱがある。この曲輪の中央、城門正面寄りには幅1,5m、長さ３ｍほどの俗に「潮吹き穴（スーフチミー）」（イ）と呼ばれる穴がぽっかり口を開いており、そこから縄梯子などを使えば海に降りることが可能である。また、このⅡの曲輪の西側には石垣が途切れるところがあって搦手となる虎口（ロ）が開いている。現在転石などがあってはっきりしないが、周辺の状況などから見て、かつてこの周囲には海におりる路が取りついていたものと思われる。曲輪Ⅱをさらに奥に進むと一段高くなった場所があり（曲輪Ⅰ）、ここにはきちんと面取りされた切石が一列に並んでいるのが確認される。現状では根石だけが残されているため判然としないが基壇の跡ではないかと思われる。この部分は城内で最も幅の狭いところでありくびれ部にあたる。曲輪Ⅱとの比高差が約1,5m、曲輪Ⅲとの比高差は約3,5ｍもある。

城全体の規模は、長さが東西82m、南北の幅は曲輪Ⅱで33m、曲輪Ⅰで16～17mである。城の下の海岸に降りるには、現在では城門の東約20mいったところの急な坂路（ハ）が使用されているが、かつては前述した曲輪Ⅱに開いた搦手を使っていたものと思われる。なお、城の下の海岸には自然の岩陰などがあって沖縄戦の際の戦争遺跡になっている。

城内に立つと太平洋がすぐ眼の前に広がり海上を航行する船の動静を伺うのに最適の場所である。したがってこのグスクは海上交易権の確保を目的とした海上貿易の中継拠点の城だと結論づけてよいであろう。

その他のグスク

その他、旧喜屋武間切内にはカタハラグスクと喜屋武古グスクの二箇所のグスクが知られている⑭。カタハラグスクは、具志川グスクの東南東約700mの海岸縁にある大岩で、久米門中の人々の間で具志川グスクの倉庫の役割をもっていた城だという口碑を残している。このグスクは、現在地滑りなどによって陸地から分離して海岸に独立した形で屹立しており城内に入ることができない。したがって、城内の遺構や遺物については未確認である。

喜屋武古グスクは喜屋武漁港の上の丘陵先端部にある。ここに漁港が築港される以前は、この辺の海浜は砂浜が広がっており、船などをあげる空間として最適な場所であった。現在、漁港へ降りるコンクリート舗装路などのために周辺の地形が改変され、城を証拠づけるような遺構を確認することができないが、このグスクは、砂浜を眼下にしていることから、漁業資源の把握と、交易等を行う船などが出入りする港を守る城であった可能性はきわめて高い。

註

①『ぐすく　　グスク分布調査報告（Ⅰ）―沖縄本島及び周辺離島―』沖縄県教育委員会 1983年。

②『島尻郡誌』島尻郡教育部会　1937年。

③『糸満市の遺跡―詳細分布調査報告書―』糸満市教育委員会　1981年。

④『日本地名大辞典47沖縄県』　角川書店　1986年。

⑤中山盛茂『琉球史辞典』　琉球文教図書　1969年。

⑥薩摩の伊地知季安の著で、琉球が薩摩の附庸であることを歴史的に明らかにしようという意図で書かれた。19世紀の始めに成稿。3巻からなる。

⑦徐葆光著・原田禹雄訳注『中山傳信録』　言叢社　1982年。

⑧東恩納寛　『南島風土記』1950年。

⑨千田嘉博「グスクを歩く」『歴博60』国立歴史民俗博物館　1993年。

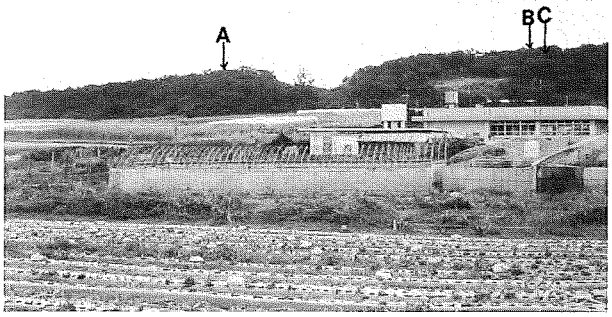
⑩前掲書①

⑪前掲書②

⑫當眞嗣一「具志川城跡」『図説　日本の史跡6中世』同朋舎　1991年。

⑬新城徳祐『沖縄の城跡』　緑と生活社　1982年。

⑭前掲書③



1．A：佐慶グスク，　B：上里グスク，　C：山城グスク
（西から）

2．佐慶グスク城壁石積み

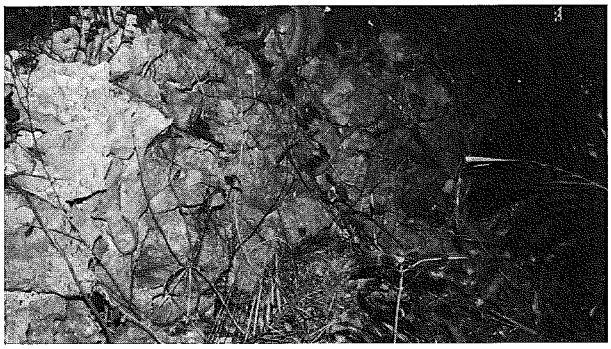
3．佐慶グスクの虎口

4．上里グスクの馬面石積み

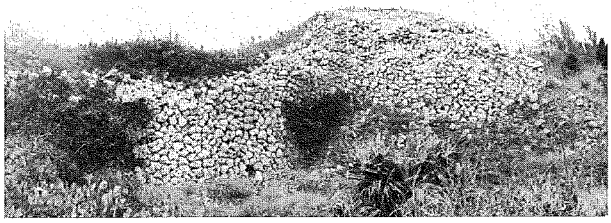
5．上里グスクの虎口

6．上里グスク（Ⅰの曲輪の女牆からⅢの曲輪を狙う）

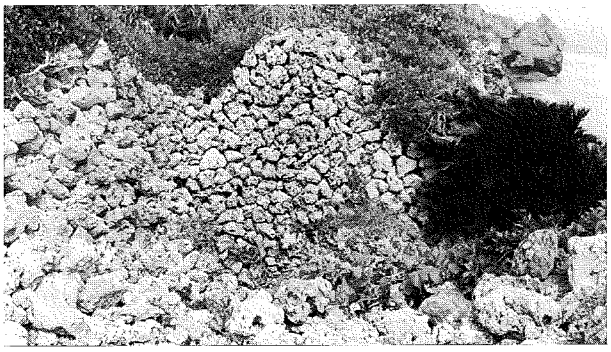
7．當間グスクの城壁石積み



8．當間グスクの城壁石積み

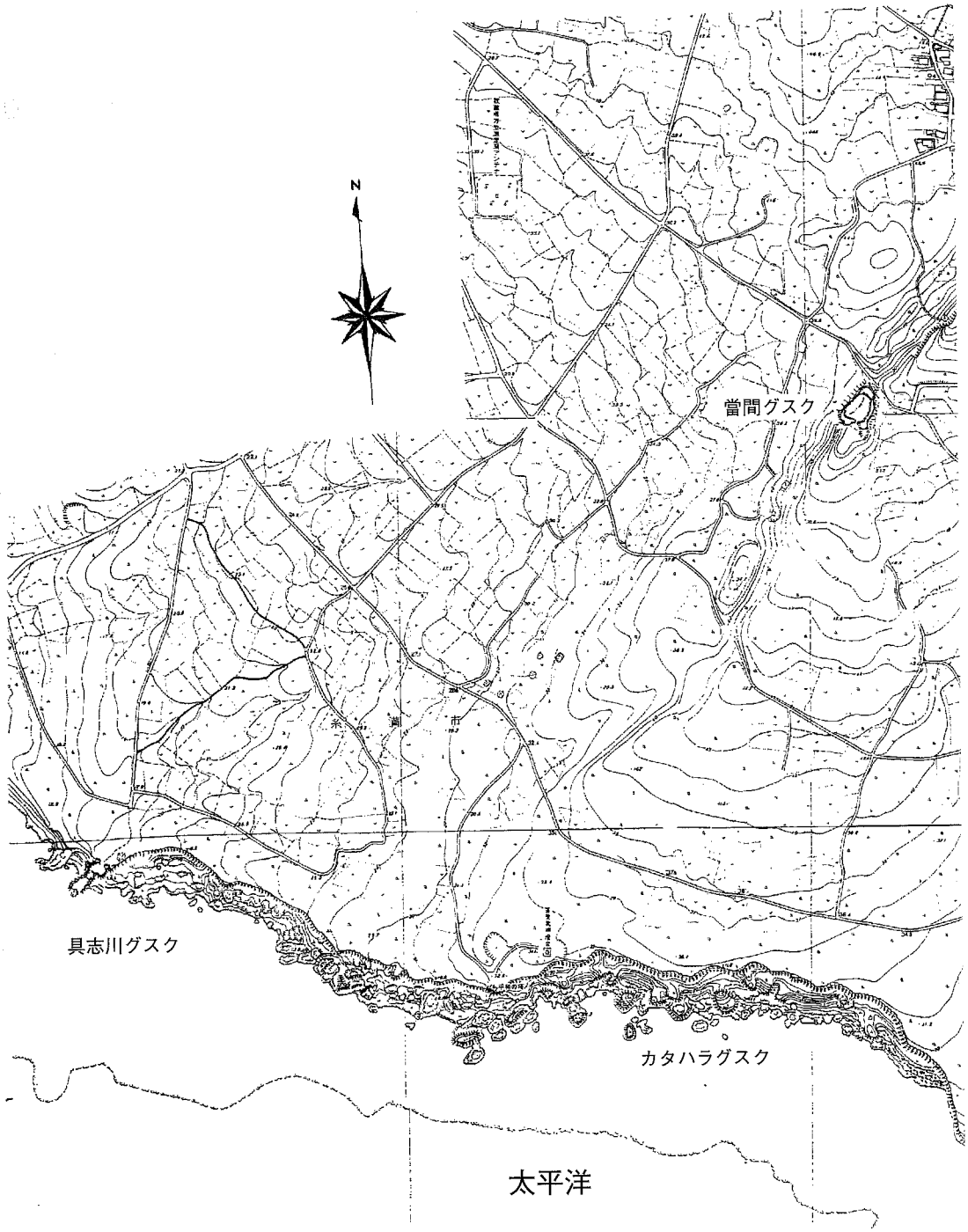


9．具志川グスク（曲輪Ⅰ内より）



10. 具志川グスク石積み

旧喜屋武間切南端の断層崖を軸とするグスク配置



山城グスク
上里グスク
東辺名グスク
佐慶グスク
0
100
200m